

転換畑における夏まき大麦の栽培法

藤原帝見・泉 省吾（長崎県総合農林試験場）

FUJIHARA, S. and S. IZUMI: Cultivation of Late-Summer Sowing Barley in Drained Paddy Field

夏まき大麦は、は種期が高温のため出芽苗立ちが不安定であり、登熟期も低温となるので殺実用栽培は必ずしも容易ではないが、極早熟品種を適期には種し、生育をできるだけ促進する栽培法によって、増収することが期待される。本報は、1978年から1981年まで転換畑において、生育促進を目的としたは種期、は種様式及び施肥法等について検討した結果をとりまとめたものである。

1. 試験方法

1) は種期試験：西海皮24号、羽系S104及びカワサイゴク等を毎年8月20日から約1週間ごとに条間50cm、まき幅15cmとして、は種量10a当り、10kgをうね立て条まきした。施肥は施肥法試験の標準区に準じた。

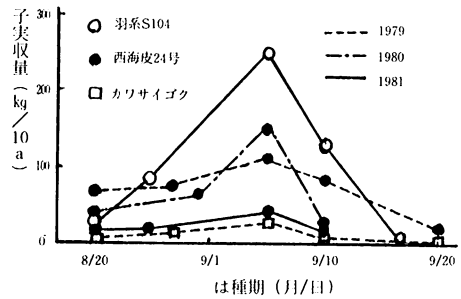
2) は種様式試験：西海皮24号を毎年9月5日前後に10a当り10kgと15kgのは種量で、条間50cmのうね立て条まき区、条間30cmのドリルまき区及び全面全層まき区を設けた。施肥量は全試験区同一とし、施肥法試験の7-5-0区に準じた。

3) 施肥法試験：西海皮24号または羽系S104を用いて、10a当りNとK₂Oの施用量を基肥-3葉期追肥-6葉期追肥の順に7-0-0、7-5-0、7-0-5（標準区）、7-5-5、10-0-0および緩効性被覆肥料10-0-0の計6区を設けた。P₂O₅と炭酸苦土石灰は全区共通に基肥として10a当りそれぞれ10kgと100kgを施用した。は種期は毎年9月5日前後とし、10a当り10kgをうね立て条まきにした。

2. 試験結果及び考察

1) は種適期について：試験の結果は、その一部を第1図に示したように、9月5日前後のは種期の子実収量が最も高く、その時期がは種適期と考えられた。それより早い

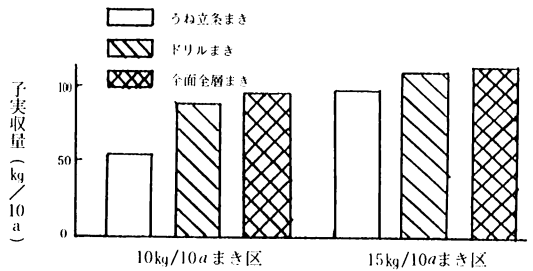
く多収は望めない。は種適期は品種系統間にあまり差がなく、適期幅は極めてせまかった。



第1図 夏まき大麦のは種期と収量

2) は種様式について：様式別に子実収量をみると、第2図のように全面全層まきが他のは種様式よりもは種量の多少にかかわらず収量が多く、そして、は種量は10a当り15kgがいずれのは種様式の場合でも収量が多い傾向がみられた。は種量が多い場合には穂数が多くなって増収しているが、全面全層まきの増収理由は年次変動等が大きくて明らかでなかった。しかし、穂ぞろいがよく、わずかに登熟が早い傾向が観察された。

3) 施肥法について：3年の試験結果はほぼ同じ傾向であったので、1981年の成績のみを第1表に示した。



第2図 は種様式と子実収量（'79～'81の3年平均）

3葉期追肥の試験区は子実収量が多く、6葉期追肥区や基肥重点区よりも増収した。3葉期追肥の増収効果は初期生育の促進によって登熟のよい穂が多く確保されたためではないかと推察された。

以上のとおり、極早熟品種または系統を用いて、9月5日前後に10a当り15kg程度のは種量で全面全層まきし、3葉期追肥で初期生育を促進すれば、夏まき大麦は今後さらに増収する可能性があるものと考えられた。

第1表 施肥法と子実収量（1981, 羽系S104）

試験区	収量 (kg/10a)	比率 (%)
7-0-0	122	105
7-5-0	142	122
7-0-5 (標準)	116	100
7-5-5	136	117
10-0-0	125	108
10-0-0 (緩効肥)	126	109

と高温や雨のため出芽苗立ちが悪く、立枯病などもみられ、8月下旬のは種はほとんど見込みがないものと考えられた。

は種適期からおくれると出芽苗立ちは安定するが、西海皮24号では出穂成熟期がおくられて低温のためにほとんど登熟せず、羽系S104はある程度登熟するが生育量が少な